

## 講義のなかで実践できる学生支援活動を模索して

杉山 雅 宏

### 1. はじめに

私たちは経済発展の恩恵を受けて現在の生活が成り立っている。そして、発展のマイナス部分に多くの人気づいているが、適切な対応策がないまま、今日に至っている。経済の発展が、若者の成長・発達にマイナスの影響を与えてしまったようである。それは、日ごろ教育現場で遭遇する、傷つきやすく自我が脆弱な若者が増加した問題である。

人は、乳幼児期の段階で、親子の基本的信頼関係の構築と健全な自己愛を育むことが求められる。自己の存在が他者から脅かされるという不安を排除させてこそ、自己の尊厳性を確立することができる。この段階で初めて教育をする段階に至る。子育ては、効率を追い求めるのではなく、あれこれと失敗を繰り返し、右往左往しつつも家族や身近な人々に多様な感情や行動を受け入れてもらいながら、自己を確立する。このようにして、みじめさや厳しさに耐えられるように成長する。しかし、科学技術の進歩と発展による、社会のスピードは、子どもの社会化に必要な安心感を保証する家庭、学校、地域社会をも支配・コントロールするようになったと言える。子どもたちが泣いたりぐずったりと否定的な感情を大人にぶつけても、そうした行動や感情につきあうゆとりが大人になくなってきた。子どもたちは良い子でお利口さんでなくては大人たちに認めてもらえなくなった。大人たちは、社会のスピードに振り回され、子どもの感情に寄り添うゆとりをなくしてしまっている。このようなプロセスを経て、不適応状態にある学生に加え、人間関係の乏しい学生が多く大学に入学するようになってきた。こうした学生の心の内側を理解することは難しい。しかし、

少しでもわかっていなければ、学生支援活動は困難になる。

「勉強の習慣ができない」「挨拶やマナーを知らない」「現実吟味や判断する力が乏しい」「対人関係が希薄である」「将来のイメージが持てない」など、数え上げればきりがないう学生の変化について「最近の学生は変わってきた」の一言で片づけてしまえば、学生を理解するのではなく、これは理解の放棄とも言える（大山，2006）。まずは、学生に向かい合い根気強い対話を行っていく他ないのである。

学生相談も垣根の高いものではなくなり、具体的に困った状況に遭遇したときに相談室へ行くというのは特別のことではなくなった。実際に学生相談を訪れる学生数は増加傾向にあるようである。日本学生相談学会による学生相談に関する全国調査でも、各大学で学生相談の来談率が増加していることが報告されている（吉武他，2010；大島他，2007）。筆者が担当する保健管理センターの面接業務においても、23年度の来談者は、延べ数で22年度の2倍に増加した。さらに24年度の利用者も12月末の段階で、前年度の利用者数を上回っている。ひとつの要因として、学生相談が一部の病んだ学生のためではなく、誰もが自分の成長のために利用するものであるという認識が少しずつ広まってきている証と考えることができる。もう一つの要因は、学生が対話を求めていると考える必要があると私は考えている。少数ながら、筆者が接している事例からも、学生たちは自分の思いを話して受け止めてもらい、ときにはコメントをもらい、自分の感じ方、考え方の1つ1つを確認していくことを強く求めているという印象を受ける。河地（2005）も、調査研究で、現代の大学生は真面目で勉強をしたいという意欲はあるものの、自分の能力に自信を持っていないため、自分を押し出す力がないため、まずは関わる機会を増やす必要性を指摘している。

日常的な人間関係のなかで、学生自身も対話から逃避している。学生た

ちは自分の本当に思うところをぶつけ合うことはしないし、それはできないという。情報網の発達の影響か、学生は複数の集団に器用に属し、それぞれの状況での自分というものをもち、深入りすることなく複数の関係を上手に渡り歩く。これは、状況に応じてペルソナを演じ、本当の自分を隠しているのではなく、本当の自分がない、ペルソナのみ状態とすべきである。これこそが、現代に適応的な生き方なのかもしれないが、このような生き方は、自分の人生の危機的局面で破綻をきたす。自分にとって何が正しくて何が適切でないのか、何が自分の希望で意思なのか、何を自分が好むのか、こうした問いかけに対して、全く見通しが立たないのである。

人間関係だけでなく教育的関係も、しだいに合目的で機能的となってきた現在において、学生が自分というものを表出し確認していく場を確保していく必要がある。そのひとつが学生相談の場であることは確かである。それだけでなく、人と人とがともにいる教育の根本として、学生と向かい合う余裕の大切さを日々痛感する。

本稿では、筆者が講義を通じて展開する学生と向き合うささやかな学生支援の実践を紹介する。学生は案外多くの問題を抱えているが、大学生になってこんなこと聞いたら馬鹿にされるのではと思い、心を閉ざしきみであることも否めない。日々心の内に蓄積されていく埃を拭き取っていかないと、気づかぬところで学生の心が壊れていってしまう。それを防ぐために、高等教育機関においても、あらゆる場面で学生の問題を吸い上げ、コミュニケーションを通じて問題解決に資する学生支援の方策を模索する必要性を痛感している。

## 2. 保健管理センターの利用状況

保健管理センターの専門的心理支援の窓口を利用している学生は、全体の1割にも満たない。しかし、利用していない学生が問題を抱えていない

とは言い切れない。多くの学生は“問題を抱えつつも成長志向の高い学生”といえる。特に薬学部学生は、様々なストレスを抱えている印象を受ける。医療技術の進歩に伴う学習量の増加は、国家試験合格が第一義的課題となる学生にとってはストレス源になることは確かである。また、自ら学び考える姿勢が乏しく、精神的成熟度の低下も懸念される。与えられた課題はある程度そつなくこなすが、それ以外のことはやらなくてもよい、ゆとりがないという姿勢が見え隠れする。学生は重大な自己決定場面（進路選択・決定など）からもともすれば逃避し、他罰的傾向も強くなり、人間関係のトラブルに発展することも危惧される。勉強に関係ないことは後回しにするという姿勢がしみつくと、対人関係においても挨拶などマナーの部分で社会との摩擦を起こし、そこでもストレスを感じることもあるだろう。

本学では、主に学生の心理的課題は保健管理センターが請け負う形をとっている。保健管理センターでの相談者をカテゴリー別にまとめると、Table 1 のようになる。

Table 1 保健管理センターにおける相談概要（23年度）

	カテゴリー	主な症状	対応
Aタイプ	統合失調症や重篤な感情障害が疑われる学生	自殺をほのめかす。自傷行為。感情表現に乏しい。	家族の理解・協力→医療機関との連携。
Bタイプ	パーソナリティ障害・発達障害が疑われる学生	人間関係のトラブルを学内外で起こしやすい。	医療機関との連携＋定期的な面接支援。
Cタイプ	神経症や神経症性うつ病が疑われる学生	身体の不調を訴える。学習面で苦戦する。学習面で不安を抱えている。	医療機関との連携＋定期的な面接支援。状態に応じ、高頻度の面接支援。
Dタイプ	問題を抱えているものの成長志向が比較的高い学生	身近な人や社会・組織に対して批判的で、イライラ感が強い。トンネルを抜けたいと思いつつも、抜ける術を知らない。	問題解決に悩むときに、集中的な面接が必要。不定期ではあるが課題が生じるたびに関わる。

\*カテゴリーの分類は、筆者が独自に行った。

多少の大学間格差はあるものの、概ねどこの大学も上記に準ずる内容の相談が、保健管理センターや学生相談室でなされている。ただ、本学の利用状況の特徴として、①利用者の男女比は2：8で、女子学生が圧倒的に多い、②学年別では、1年生利用者が全体の45%、2～4年生が45%、5年生以上（大学院を含む）が10%であることが挙げられる。

保健管理センター利用状況の特徴から、以下の課題を読みとることができる。

- (1) Table 1のDタイプ学生については、「問題を抱えている健常者」（國分，2004）と位置づけることができる。保健管理センターでの心理的支援よりも、日ごろの教職員とのふれあい場面で、自己解決を促す支援が望ましいものとする。学生の話聴く機会を増やし、ちょっと背中を押すことにより、学生は成長する可能性を秘めている。特別な相談窓口を利用しない支援方法を模索する必要がある。
- (2) 担任制を導入し、きめ細かい学生支援を行っていることも事実であるが、そこでは学習支援が話題の中心であるという話を多くの学生から聴く。身近な生活課題を効率よく解決することで担任制をサポートし、学習環境を整えることも今後必要な支援ではないだろうか。

### 3. “リアクションペーパー”を通じた学生支援の実践

次に、私が担当する講義（こころの科学）における“リアクションペーパー”を通じた学生とのコミュニケーションを活用した“質問タイム”＝“10分間ミニ学生支援”の現状を紹介・分析する。

#### (1) 実践方法

- 1) 対象は、1年生“こころの科学”履修者330名。
- 2) 毎時間講義終了後、リアクションペーパー（出席票を兼ね、講義での気づき、感想・意見、質問などを書く）を回収する。そこに書かれた質

問を抽出し、翌週学生全体に回答する。但し、講義開始後10分以内とするため同種の質問は一括処理するなどの制限はある。学生とのコミュニケーション、学生に考えさせることが主目的であるため、回答はヒントを与える程度とする。

- 3) 質問は原則、講義に関する内容とする。ただし、時間が許す限り心の問題に関することであれば取り上げる。
- 4) 個人的な質問は原則として受け付けない。全体で共有できるものが望ましい。保健管理センターでの相談内容とのすみ分けをする。
- 5) “質問タイム”の是非についても学生に問う（年度末の講義で実施：自由記述）。

## (2) ねらい

- 1) まずは学生に話を聴く習慣を身につけさせたいと考えた。彼らに一方的な話を聴く習慣が身につかないのは、小学校・中学校時代から学級崩壊などの影響を少なからず受けており、集団形成を維持する能力が不足がちなためであると考えられる。リアクションペーパー上の疑問・質問は自分たちが取り上げた自分たちの問題である。これに対する教員の回答、しかもそれが10分間であれば、聴くに堪えないという状況ではあるまい。聴くための訓練は、まずは短時間の経験を繰り返す、スモールステップが望ましいと考えた。
- 2) 学生の変化、成長を促すためには、活動性の高い講義を模索する必要がある（安永，2010）。そのために、聴くだけでなく学生同士が学び合う対話を取り入れた教授法を取り入れることも必要である。講義で学生を孤立させるのではなく、学生同士をつなぎ、互いに学び合える場を演出することもときには必要である。10分間の限られた“質問タイム”の時間を、学生からの質問に対する回答を全員で共有することにより、学びを自分の問題として捉えられるよう促す。そして、何よりも教員と

学生がつながる場面を創出し、学生の現状に向き合うことが大切である。

- 3) 学生自身によって発せられ書き留められたリアクションペーパー上の質問(言葉)に即して教員が回答することで、学生が自分自身・他者について考えるきっかけとする。教員からの回答や他者の質問を聴き、自分の感じ方・考え方と他者のそれとの間にある相違や類似とは、どのようなものなのかを学生に考えさせる。自分の疑問・考えを他者と共有し、コミュニケーションすることが、質問・回答をフィードバックさせるねらいでもある。

### (3) 結果

- 1) 質問内容をカテゴリーごとに分類すると、概ね「講義内容」、「自己理解」、「対人関係」、「担当教員」、「親子関係」、「社会問題」、「その他」となる。
- 2) 質問数は毎回1クラス15～25問程度であった。
- 3) 平成23年12月1日の3クラス全体の質問数は45問。内容は、「講義に関する内容」(18)、「自己理解に関する内容」(10)、「対人関係に関する内容」(6)、「担当教員に関する内容」(5)、「親子関係に関する内容」(3)、「社会問題に関する内容」(2)、「その他」(1)であった。( )内数字は人数。

講義内容に触発され、自分自身に関することを質問してくる学生が多い。この日のテーマは「自己理解を深める」。質問としては、「自己理解するための自分への質問が思い浮かばない。例えばどのようなことを自分に問いかければよいのか」「自分の存在価値が分からない。周りから必要とされていないのではないかと毎日考えてしまう」「周りの言葉が信じられない、周りの言動がすごく気になり落ち込む癖がある。どうにかしたい」「嫌な人を放っておこうとすればするほど、その人の言動が気になるのはなぜか」「人の目ばかり気にしている自分がいるが、改善

方法はあるか」「嫌なことがあると、アニメや二次元の世界に逃げるが、こんなことでよいのか」「急にやる気がおきなくなるが、どのように解決すればよいか」「嫌なことがあると、翌日頭が重くなり起きられない」などが目立った。

- 4) 今までの質問の一部を以下に紹介する。尚、( ) 内が教員からの回答である。関わることを主眼とするため、ヒントを与える程度にとどめる。

<講義内容>

①「基本的信頼があると、怒られても受け入れられるとのことだが、反抗期はこの基本的信頼が崩れたから反発したくなるのか」(→基本的信頼は信頼と不信がベースにある) ②「自殺未遂を繰り返す人には何が足りないのか」(→どうにもならない苦しみを乗り越えたいのでは) ③「男性が受けたDVには具体的にどのようなものがあるのかを知りたい」(→女性だけの問題でないことに注目) ④「統合失調症は脳に何か異常が起こって発症するのか」(→明らかにされていない部分がある) ⑤「1人なのに誰かと会話しているかのように話続けている人は幻聴のようなものがきこえているのか」(→可能性はある) ⑥「患者の妄想を受け入れてしまったら、妄想の世界から抜け出せなくなるのか。受け入れることはよいことなのか。本当に改善に繋がるのか」(→共感することが大切)

<自己理解>

①「1年ほど前、受験勉強が忙しいときに仲良くしていた親戚が自殺したが、通夜で遺体を見ても悲しみをあまり感じなかった。感情が麻痺してしまっているのか」(→現実を受け入れるためにかなり時間がかかることがある) ②「テストの時に自分の頭の中にもうひとりの自分が存在して自問自答して答えを見つけたりすることがある。これは思考化声



ととらえてよいか。同じように授業中に自分の好きな曲が頭の中でリピートしていることがあるが、一体何か」(→即答は困難。経過観察) ③「対人場面で声が震えるほどの緊張は過度の緊張と言えるか。過度の緊張であるという場合で、さらに負けず嫌いである場合は強気と弱気の二面性を持っていると見なされ社会不安障害といえるのか。自分のことで心配になった」(→診断を求める場合は医療機関に相談) ④「ストレスを感じてないのにストレスを感じたときに出る症状がでるのはなぜか」(→人は常にストレスにさらされている) ⑤「傷つきやすい性格なのに、他人に対していつも傷つくような発言をしてしまう。自己中心的な考え方なのか。対処法はあるか」(→気づいているだけでも改善の余地あり) ⑥「遅刻しそうなときに、諦めのような無気力のような、どうしても急げない時がある。どうしたらよいか」(→時には諦める勇気も必要) ⑦「そうではないのに“そうかな”と思うとその気持ちになってしまうのはなぜか」(→考え方が柔軟ですね) ⑧「忘れたいことを忘れるにはどうしたらよいか」(→忘れたいことは忘れられない、覚えたいことが覚えられないのが皆さんの苦しみですかね) ⑨「すぐにカッとなりイライラする。性格なのか？ そうだとしたら、治せるか？」(→いつも真剣勝負しているのですね) ⑩「講義中、眠くなってたまらない。規則正しい生活しているのに、どうしたらよいか？」(→講義に集中したいという熱心さは伝わる) ⑪「器の大きな人になるには？」(→例えば、待合わせに遅刻した人に対して、どうして遅れたの?と責めず、早くあなたに会いたかったと言う)

#### <対人関係>

①「異性の友人にメールで告白したが返信がない。どうしたらよいか」(→返事が来ないのが返事かな？ 深追いすると傷つくかも) ②「勘違いをしている人に事実を伝えるにはどんな言葉を使ったらよいか (アフタ

ーケアも) (→勘違いも大切な考え。他者を無理に変えようとせず、尊重する姿勢も必要) ③「自信がない友人に自信を持たせるにはどうしたらよいか」(→見守り心配し続けることも大切) ④「自分の部屋から出られない人がいるが、どうしたら出てこられるようになるか。家族とのコミュニケーションも電話を使っている」(→つながりがあるだけでもよいのでは)

<教員に関すること>

①カウンセリングしていて、クライアントに絶望を感じたことがあるか」(→そうなると、失業ですね) ②「カウンセラーは、心の弱い人ではなれないか」(→強い・弱いよりも柔軟な心が大切) ③「先生は朝起きるのが早いか。どうすれば早く起きられるか」(→健康と早起が一番の財産です)

<家族問題>

①「家族にうつ病患者がいる。うつ病に将来ならないようにするには？再発しないようにするにはどうかかわるべきか？」(→“治そうとするな、わかろうとせよ”の気持ちで接する) ②「大学生の門限9時をどう思うか。10分程度過ぎただけで、異常なくらい大きめに怒り、“犯罪に巻き込まれたらどうする”と言われる。強迫観念か？」(→終電で出かける勇気がなければ受容するしかないのでは。保護者の深い愛情を感じますね) ③「親のDVをみて育った人の心の傷は治せるか。治せるならばどうやるのか。自分を含め兄弟が傷ついている。病院に行くという回答はなしで」(→回答の幅を狭めないようにしましょう) ④「伯母の病気は社会適応が難しいレベルの統合失調症である。自分が薬剤師になろうと思った理由の1つが伯母の病気だ。伯母レベルでも今から治る可能性はあるか」(→神谷美恵子『生きがいについて』を読むことをお勧めします)

<社会問題>

①「引きこもりは若い人に多いのか。当人は自分を引きこもりだと自覚しているのか」（→様々なケースがあるようです）②「統合失調症などの刑事責任能力について。殺人でも無罪なのか。謝罪もないまま終わってしまうのか」（→法の世界は謝罪云々ではなく、責任能力の有無で判断する）

5) “質問タイム” の是非

“質問タイム”を次年度も継続すべきかについて、全員に尋ねた（平成23年度末講義で実施）。理由も自由記述で回答。320人が継続に賛成、反対3人、無回答7人であった。賛成する理由の主なものを以下に記す。

<気軽に相談できる場である>

「直接相談に行けない人にとっては悩み解決のよい機会である」「簡単に質問できるのはよいアイデアだと思う」「何気に学生の悩みを解消してくれる場」「質問に行くのが苦手な人もいるから気楽に質問できる」「個人的に相談室に行って質問しようとは思わないが、この方法だと気軽に質問することができる。また、この後、勇気を持って相談してみようという気持ちになる」「直接向かい合って聞きづらいことも、リアクションペーパーを通じてやり取りできる。匿名だから」「なかなかこういう相談できる場がない」「授業がカウンセリングの一部になっている感じでよい」

<自己と向き合う時間として有効である>

「他の人の質問も聞いてみると、自分にもよくあてはまるから」「自分でも気になっていても気づけなかったことを聞ける」「他人の質問を聞くと、色々と自分自身の生き方・あり方を考えることもある」「自分にはない考え方を知ることができる」「自分と同じ考えの人がいると自分だけではないと思ひ、安心する」「新しい考え方ができたり、自分の成

長に繋がったりする」「自分の考え方が広がった」

<他者理解を促す>

「人の質問に共感できるものがあったりする」「生活環境や性格などが違うと同様に抱えている悩みもそれぞれ違うから、他者理解が深まる」「他の人が何を考えて授業を受けたか分かり、ためになる。刺激にもなる」「仲間の心理を知れる数少ない機会である」「他の人がどのようなことに悩んでいるのかを知る貴重な機会」「ああ、こんな悩みを抱えている人もいるということがわかる」

<教員との距離が近くなる>

「リアクションペーパーでのやりとりを通じて、教員とつながっている感覚を覚える」「先生が担当した話がちょくちょく聞ける貴重な時間。先生の存在が身近に感じる」「ちょっとした質問に答えてくれるのはありがたい。一番印象に残っているのは“恋愛ほど答えがないもの”と言っていたこと」「先生が私たちとコミュニケーションをとってくださることで心が落ち着く」

<講義の振り返りができる>

「授業に関する質問が多く、前回学んだことが身近に感じる」「自分が授業で気づけなかったことに気づくことができる」「講義に対する堅い雰囲気も和らぐ」「自分の知識が増える。他人の疑問を知りたい。その疑問を聞くことで、知りたいと思うこともある」「授業が楽しくなるし、身近なことを知り、心理学についての興味がわく」「質問していない人も学べる」「10分間で授業へのモチベーションがあがる」

#### (4) 小 括

- 1) 1日20件から30件の質問があるという事実を見逃すことはできない。学生の悩みを受け止める場が必要であることの証である。質問の内容は、千差万別で確かに大学生としての内面の成熟に若干の疑問をもつものも

ある。しかし、その部分に教員が対峙し、つきあっていかななくては、学生の成長はない。まずは学生の現状を受け止め、さらに、じっくり学生の話の聴く場を模索し続ける必要性を痛感する

- 2) 保健管理センターを利用しない学生でも、様々な課題を抱えていることがアクションペーパーの記述から明らかになった。「これを楽しみに講義に出席する」という学生もいるが、学生の課題を講義で拾い上げ、学内で情報共有することで、学生支援の幅も広がる。また、メンタルヘルス1次予防機能も果たせるのではないか。
- 3) 全体の前では回答できない個人的な悩みを書いてきた学生に対しては、個別相談をするよう回答した。こうした学生は、後に保健管理センターを来談した。「個人的な問題は保健管理センターで予約してね」と回答し続けたことで、専門相談への橋渡しを可能にした。保健管理センター利用者予備群を顕在化させる役目を果たした。
- 4) 講義中の(教員)1対(学生)多数のやり取りで、質問者とそれ以外の学生の問題解決に寄与した。こうした方法で学生相談に準ずる支援が可能であることが分かった。それだけでなく、学生は教員との対話を求めているという事実気づくべきである。学問を通じてのふれあいだけでなく、生活場面面的な支えにより、彼らの学生生活を支援する必要がある。学生相談以外の場面で、学生と向き合い話し合う時間を意識的に作っていく工夫も必要であることに気づかされた。学生とつきあう密度をいかに濃くしていくかを今後検討・工夫する余地がある。
- 5) 他者の質問に対する回答を聞き、自己を振り返る機会となり、自己理解・他者理解の促進に繋がった。他者が気になることはよくあるが、自分を気にする機会を意識的にもつことは少ない。自分を見つめなおすきっかけづくりに活かすこともできる。
- 6) 間接的手法であるが学生参加型講義の実践により、講義への関心を高

めることも可能となる。まずは講義に参加させ、そのうえで、自己や他者への関心を持たせ、教員との相互作用を通じ、自分について考えさせる種まきを続ける必要がある。身近な課題を「何とかしたい」という気持ち、意欲を引き出さなければ、学生の課題解決能力を相対的に高めることは困難である。講義、すなわち学習支援活動においても、学生の自己実現を援助することは可能である。学生の自己実現を促すには、誰かがどこかで学生を気にかけてくれる、場所列も時間列も繋がって見ていく連続的関与が必要である。

## 4. 考 察

### (1) 情報化社会の弊害

社会が豊かになり学校を脅かすようになったものに、情報化社会の到来があげられる。インターネットなどの普及により、学校の知的独占機能が崩れたと言っても過言でない。今大学に来ている多くのものは、学校以外の場面で、十分な知識を入手しうる環境下で学んできた。学校は、情報産業が未発達時代にあっては、知的情報を届ける最大のマスコミであったと言える。しかし、今の若者にとっては、そうした絶対性や権威はない。

学校は、マスコミやインターネットではできないことで、魅力を取り戻すことが求められている。具体的には、対人関係や体験を伴う学習である。マスコミやインターネットで情報提供はできるが、コミュニケーションや実体験は提供できない。少人数での対話型学習は対人関係を重視するし、総合的な学習は実体験を伴う。大学生は、すでに小学校の段階からそうした体験を少しずつ経験し大学に入学してきている。

情報化社会のなかで、必然的に学生は教師に話を聴いて欲しくなる。今までの教育は、授業という形で学校が若者に知的情報を供給する機能を果たしてきた。しかし、大学生は、子どもの時代から、これらの多くをマス

コミなどの社会資源から取り入れる体験に慣れていて、情報過多に陥っているとも考えられる。彼らは、精神的なバランスを崩すほどに吸収した情報や知識を整理したり消化したり、必要ない情報を削除することを手伝って欲しいと、大学や教員に求めている。

こうした部分の課題解決を含めて高等教育機関が教育の一場で担うべき時代が来ている。この機能を果たすためには、人の話を正確に聴いてもらうことでしか達成できない。学生が教員に話を聴いて欲しいと望むのは、精神的に弱くなったからだけではないと考えられる。社会が豊かになり、物があふれリサイクル産業が発展したのと同じ理屈である。物が増えれば大量の廃棄物をどのように処理するかが社会問題になる。これは個人が物を大切にしない、始末が下手になったこととは全く別次元の問題である。

講義を学生が聞けなくなったことも深刻な問題として取り上げられ久しい。この現象も単に、話を一定時間聞くだけ辛抱する力がなくなった、知的関心が低下したという次元のみで説明することは難しい。学生たちは児童・生徒の時代から、そんなことは知っている、聞いたことがあると、集団形成を成り立たせなくする（河村他，2007）ほどの情報の渦のなかで、その真偽は別として知的情報にさらされ続けてきた。何が真で何が偽かの選別する手伝いを大学や教員を含めた大人に求めても不思議ではない。情報の少ない時代に歓迎された、知的情報を供給するという学校の機能が、情報化社会の到来とともに学生を苦しめる源泉になっているという解釈もできる。「講義前の10分間の質問タイムで、新しい考え方が身についた」という学生の声からもわかるが、学生は間違った考え方に長いこと苦しめられていたとも考えられる。

## (2) 学生を個人として尊重するために

物や情報の溢れる豊かな時代は、生活や教育の在り方を大きく変化させた。それは個人として尊重される時代として現れた。この概念は、A. マ

スローが提唱した欲求5段階説の一部、自尊の欲求である（上田，1998）。この概念を教育に当てはめると、人は社会が豊かになるにつれて、単に知識や技術を学ぶだけでは満足せず、教育の場面で「個人として尊重される」ことを求めるようになる。

教育とは本来、個々の事情を考慮すると効率が悪くなる（例えば、一斉授業が成立しにくくなるなど）ため、個々の事情は考慮しないようにしてきた。経済的な制約のなかでは、やむを得ないことである。これまでは、長らく学生が大学の実情に合わせていたと考えることもできる。

「個人としての尊重」について理念としては語られてきた。しかし、実現するにはそれを可能にするだけの豊かさを享受しなくてはならない。高等教育の場面で、学生の欲求に合わせなくてはならない場面を創出することは、至難の業ともいえる。幸いカウンセリングは、人の話を正確に聴く技術であるため、こうした特質が功を奏し、学生相談という形で教育場面に導入されたといえる。

すべての教員がカウンセラーになる必要はないが、学生の話を正確に聴く力を身につけていくこと、聴こうとする姿勢を示すことは、今後の大学教員に求められる重要な資質の一部となろう。

身近なところで悩んでいる人は多くいる。リアクションペーパー上で、「自分のことが好きになれない」「自分のことが嫌いだ」「友だちと比べ自分は劣っている」「自分なんていないほうがよいのではと考えることがある」などの記述も珍しくない。さらに、自傷行為についても取り上げてくる学生の声は多数に及ぶ。公立中学・高校を対象にした文部科学省の調査では、自傷行為をする生徒の割合は中学生で0.37%、高校生で0.33%である。これは生徒500人規模のマンモス校で、自傷行為をする割合が1～2人ということである。しかし、これが正しい数字かどうかは疑問である。リアクションペーパー上の記述数からも疑問を呈さざるを得ない。松本



(2012)の調査からも、自分を傷つけたことのある若者は10人にひとりの割合で存在するということがわかっている。つまり、教員や保護者が把握していないだけの話である。

学生が本音を話さなくては、教員は学生に追いつくことはできない。学生のあり方が目まぐるしく変化する時代、個人として尊重されることを求められる時代だからこそ、人と人とがともにいるという教育の根本として、向かい合い話し合うという時間を模索する必要性を痛感する。

## 5. 今後の課題

本稿では、講義のなかでも実践可能と思われる学生支援の一手段を提示した。もちろん、こころの科学（＝心理学概論）という科目の特殊性がこうした実践を可能にしているともいえ、すべての高等教育科目で導入できるという普遍性には乏しい。ただ、昨今の学生気質を考慮すると、何らかの手段で、教員が学生の心に割り入って、学生が生きた意味ある経験を見出すサポートを継続する必要性は高い。本稿では、リアクションペーパーによる学生支援が学生にとって意味ある経験であったかの詳細な分析はされていない。今後は学生の声を中心とした質的分析をさらに深め、その点について究明したい。

## <引用文献>

- ・河地和子 2005 自信力が学生を変える－大学生意識調査からの提言－ 平凡社 19-56
- ・河村茂雄・品田笑子・藤村一夫 2007 学校ソーシャルスキル 図書文化社 15-33
- ・國分康孝 2004 カウンセリング心理学入門 PHP新書 43
- ・松本俊彦 2012 問題に「気づき」「かわり」、そして「つなぐ」 こころの科学『メンタル系サバイバルガイド』 日本評論社 2-7
- ・大島啓利・青木健次・駒米勝利・楡木満生・山口正二 2007 2006年度学生相談に関する調査報告 学生相談研究 27(3) 238-273

杉山 雅宏

- ・大山泰宏 2006 学生に取り残される大学改革～私たちはいつ学生に追いつくのか～  
大学と学生 502号 14-20
- ・上田吉一 1998 アブラハム・H・マズロー『完全なる人間－魂のめざすもの－』上  
田吉一訳 誠信書房 37-100
- ・安永 悟 2010 学生の変化・成長を促す初年次教育を求めて 大学と学生 6-13
- ・吉武清實・大島啓利・池田忠義・高野明・山中淑江・杉江征・岩田淳子・福盛英明・  
岡昌之 2010 2009年度学生相談に関する調査報告 学生相談研究 30(3) 226-271

\*平成24年8月31日～9月1日に、酪農学園大学において「第62回東北・北海道地区  
大学等高等・共通教育研究会」が開催されました。本稿は、第1分科会（学習・学生  
支援）で、私が話題提供させていただいた原稿に大幅な加筆・修正を加えたものです。  
発表当日、本学松山雄三教授をはじめ、フロアーの多くの皆さまより貴重なご意見・  
ご助言を賜りました。そうした皆様のおかげで本稿が出来上がりましたことに対して  
感謝し、ここに記します。